

ニュースポーツの変容過程に関する研究 (1)

～ニュースポーツの制度化と競技志向の観点から～

○谷口勇一（財団法人福岡市体育協会） 山田力也（福岡大学）

1. 緒言

本研究を実施するにあたって、報告者らが注目しなければならなかったことは、日本国内におけるニュースポーツの発展過程であり、またさらには、今日におけるニュースポーツの捉え方はいかにあるべきなのかという点であった。

この点に関しては、ニュースポーツ研究の我が国における第一人者である野々宮（1993～）の各種論稿を参考にしている。氏は、我が国におけるニュースポーツの発展過程を考えていく際、アメリカにおける「ニューカルチャー運動」、さらにノルウェーの「トリム運動」に原点があると論じ、両国における「高度産業化社会に生きる現代人のこころとからだのバランスを取り戻すために医療の代わりにスポーツを推進しよう」とする理念の高まりがあったと述べ、このような動向が後年日本においても継承されることによって、「増大してくる高齢者の健康問題は、国民一人ひとりの自覚に委ねておくだけではすまされなくなり、生涯スポーツの推進が追い風」となり、「競争原理に傾倒しない、『ニュースポーツ』の誕生をみることとなった」としている。さらに、稲垣は、スポーツ人類学的視点から、「ニュースポーツは、競争原理に終始してきた近代スポーツ文化から超克した、いわば共生原理によるスポーツ形態に近づこうとする後近代スポーツ文化の萌芽的現象である」と論じている（1995）。つまり、両氏の論旨を要約すると、ニュースポーツとは、「競技スポーツに参加できない人のために、あるいは競技スポーツが必要とする厳密な競技空間がなくても楽しめるように、という精神が生み出した」（野々宮）、いわば競技スポーツに対するアンチテーゼとしての存在意義を有しているものといえよう。

そこで本研究においては、上記したニュースポーツに関する各種先行研究を踏まえ、これまで行われてこなかったニュースポーツ実施者に対する意識調査を行い、現在のニュースポーツの実態を把握し、ニュースポーツ誕生から今日までの変容過程を明らかにしていくことを目的とした。

そのことによって明らかにしようとした事柄は、概ね以下4点である。①ニュースポーツ実施者の基本的属性の把握、②ニュースポーツ観の把握、③スポーツ価値意識構造の把握、④レクリエーションに対する意識の把握、である。この4点から、研究(1)においては、主に①、②の分析結果をもとに、「ニュースポーツの制度化と競技志向の関連性」を、さらに研究(2)では、③、④によって、「ニュースポーツ実施者のスポーツ価値意識」について検討を加えることとしたい。

2. 研究方法

(1) 調査対象者

調査対象者は、財団法人日本レクリエーション協会加盟37団体、福岡県レクリエーション協会加盟30団体の構成員と、福岡市レクリエーション・インストラクター講習会参加者であり、調査票配布数は合計1030部であった。

(2) 時期および手法

調査は、質問紙調査法を用い、平成12年3月1日～30日にかけて行った。調査票は、まず、上記各団体代表者宛に郵送し、それぞれの団体会員に配布を願い、その後、回収・返送までを依頼し

ている。また、福岡市レクリエーション・インストラクター講習会参加者に関しては、同一会場内にて質問紙を配布し、回収する集合調査法を用いている。

(3) 質問紙の回収数及び回収率

加盟ニュースポーツ団体からの回収数は、210部。福岡市レクリエーション・インストラクター講習会参加者が85部であったが、実質の有効回収数は、それぞれ183部、78部であり、合計回収数は261部であった。よって、最終的な有効回収率は25.3%となる。

3. 結果と考察

(1) 個人的属性について

分析の結果、現在ニュースポーツを「実施している」と回答した者が183名（以下、実施群）、実施していないと回答した者が78名（以下、非実施群）であった。

回答者のなかでも特に実施群の特徴を示すと、性別は、「男性」72.7%、「女性」27.3%であり、年代別では、「51～60歳代」が41.0%で最も多く、「61歳以上」が24.6%と続いており、比較的今回対象者の年代は高いことがわかった。

現在行っているニュースポーツを始めるきっかけとしては（複数回答）、「友人・知人に誘われて」が28.2%ともっとも多く、以下、「健康のため」18.6%、「仲間づくりのため」17.6%、「いきがいをもつため」11.0%と続いている。一方、「今までやってきた競技スポーツに体力がつかなくなってきたから（1.3%）」、「今までやってきた「スポーツ」に飽きたから・面白くなってきたから（1.0%）」という回答結果から、いわゆる既存スポーツ種目の代替としてニュースポーツに取り組んでいるのは少数であることがわかった。

実施群におけるニュースポーツを始める以前の、もしくは現在行っている「スポーツ」経験について訊ねたところ、「ない」との回答が31.7%であった。スポーツ経験者の中には、「全国大会レベル」の競技歴を有する者が14.8%、「地方大会レベル」が5.5%、「県大会レベル」が15.8%、「市町村レベル」が21.3%含まれていることから、本調査対象のニュースポーツ実施者の特徴としては幅広い体力や技能を有する者によって構成されているといえよう。

(2) ニュースポーツ観

表 1. ニュースポーツ観（ニュースポーツはレクかスポーツか）n(%)

	実施群	非実施群
レクリエーション的 ^{注)}	93 (50.9)	56 (71.8)
既存のスポーツ的 ^{注)}	81 (44.2)	4 (5.1)
その他	7 (3.8)	6 (7.7)
無回答	2 (1.1)	12 (15.4)
合計	183 (100.0)	78 (100.0)

P<0.001

注)「レクリエーション的」＝「むしろレクリエーションに近い」＋「完全なレクリエーションである」

「既存のスポーツ的」＝「既存のスポーツかわらない」＋「どちらかといえば既存のスポーツ」

ニュースポーツ実施群が「ニュースポーツ」をどのようなものとして捉えているかを把握するために、「ニュースポーツ観」を訊ね、非実施群との比較を試みた（表1）。

ニュースポーツを「レクリエーション的」と回答した者は、実施群 50.9%、非実施群 71.8%であったが、ニュースポーツを「既存のスポーツ的」と回答している者は、実施群で約 4 割強を占めたが、非実施群では 1 割にもみたなかった。

この結果、実施群にとってニュースポーツは「既存のスポーツとなんら変わりのないもの」であると捉えられている傾向が強いことが明らかとなった。しかし、実施群のニュースポーツ観は「既存のスポーツ的」、「レクリエーション的」とともに約 5 割を示していることから、ニュースポーツの実施種目によってもその与えるイメージが多少異なっているのではないかと推察される。

それでは、ニュースポーツはその活動自体に何を期待されているのか。ここでは「ニュースポーツに期待し得ること」として「期待要素」12 項目を質問内容として設定し、それぞれに対する期待感の程度を「強く期待 5」～「全く期待しない 1」の 5 件法によって訊ねた。結果の分析にあたっては、回答カテゴリーを間隔尺度とみなし、それぞれの項目ごとに平均値を算出し、実施群と非実施群を比較検討した（表 2）。

表 2. ニュースポーツへの期待度

	実施群	非実施群	t 値
友人や知人との交流を楽しむ	4.64	4.26	***
身体を鍛える	4.11	3.58	***
心身のリラックス	4.41	4.34	n.s
家族との交流を楽しむ	3.55	4.00	**
自然に触れる	3.52	4.11	***
日常生活からの開放感をあじわう	4.02	4.29	*
知識や教養を高める	3.55	3.39	n.s
好奇心を満たす	3.87	3.84	n.s
スリルをあじわう	3.34	3.63	*
実益（収入）に結びつく	2.15	2.05	n.s
世代や地域を越えた人間交流	4.43	4.34	n.s
相手との競争	3.12	2.66	**

(有意差 $P < 0.001 = ***$ 、 $< 0.01 = **$ 、 $< 0.05 = *$)

結果としては、両群のニュースポーツに対する期待度の高さには違いがみられている。まず、平均値の高い上位 3 項目を両群挙げてみると、実施群は「友人や知人との交流 (4.64)」、「世代や地域を越えた人間交流 (4.43)」、「心身のリラックス (4.41)」の順。非実施群では「心身のリラックス (4.34)」、「世代や地域を越えた人間交流 (4.34)」が同率、次に「日常生活からの開放感をあじわう (4.29)」の順となっている。

では、両者の平均値の差が大きい項目を抽出したい。実施群が非実施群の値を上回っている項目は「身体を鍛える (0.53)、実施群 4.11 - 非実施群 3.58」、「相手との競争 (0.46)、実施群 3.12 - 非実施群 2.66」。非実施群が実施群の値を上回っている項目は「自然に触れる (0.59)、実施群 3.52 - 非実施群 4.11」、「家族との交流を楽しむ (0.57)、実施群 3.55 - 非実施群 4.00」となった。

では、実施群は今現在活発に行っているニュースポーツ種目（組織）が上部団体に加盟することに対してどのような意識を持っているのか。「体育協会」と「レクリエーション協会」に対する加盟意向について訊ねたところ、2つの団体への加盟意識は肯定的であることがわかった。

さらに、彼ら（実施群）は、今現在活発に行っているニュースポーツ種目が、全国大会や国際大会で開催されることに対して約9割の者が賛成（「大いに」＋「まあ」）と回答しており、現在実施種目のいわばメジャー化を望んでいることが明らかとなった。

4. 結語

わが国におけるニュースポーツは、その発生以来どのような変容過程をたどってきたのだろうか。ここでは今回明らかになった分析結果と先行研究の所見から検討を試みることにする。

前出の野々宮によれば、わが国においてニュースポーツという表記が用いられるようになった時期は1970年代後半とされている。その時期のニュースポーツは、障害者、健常者、老若男女を問わず「みんな」が手軽に参加できるスポーツの総称といった意味合いが強く、そのことは国民体育大会という競技スポーツイベントに対抗する形で設立された全国スポーツ・レクリエーション祭の登場によって、よりその概念を強固なものにすることとなる。つまり、当時のわが国におけるニュースポーツとは、「競技スポーツではない手軽で誰でもできる新しい身体活動」であったと捉えることができ、いわば、既存スポーツに対するカウンターカルチャーとしての位置付けが適切であったと考えられる。

しかしながら、本研究において、明らかになった事柄から推察すると、今日におけるわが国のニュースポーツは、その「質」を変容されていること（しようとしている）がわかる。すなわち、そのことは実施者自身の意識が明らかに競技志向化に向かっていること、さらにニュースポーツ自体のいわゆるメジャー化を意図していることから確認できよう。

このような変容の要因として考えられることは、ニュースポーツ組織の変容、すなわち「組織自体のスポーツ化」という事態が生じてしまったせいなのではなからうか。江刺は、競技スポーツと軽スポーツ（この場合、ニュースポーツを軽スポーツと捉え）の差異を歴史的、組織的、さらには競技成績に鑑みながら、「正統的スポーツと異端的スポーツ」、「ヒエラルヒー型スポーツとネットワーク型スポーツ」、さらに「スペシャリゼーション志向とトータル・ヒューマニズム志向」とに区別しようとした。確かに、ニュースポーツが発生し、社会的に認知され始めた時期はそのような区別が適当であったと思われるが、行政をはじめとした関係機関がニュースポーツを生涯スポーツ振興の戦略として位置付け始めたこと、さらには日本独自の文化・風土～組織内のタテ社会の力学が発揮され始めたこと等によってニュースポーツは変容を余儀なくされてきているのではなからうか。このことはゲートボールの事例に象徴的であるといえよう。

主要引用・参考文献

- 野々宮徹「ニュースポーツへの接近」ニュースポーツ研究会編『ニュースポーツとは何か～そのスポーツ史的考察』平成4年度水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書. 1992
- 野々宮徹「ニュースポーツのあゆみ」みんなのスポーツ. 1998
- 稲垣正浩「ニュースポーツの誕生とその背景」体育科教育. 1995
- 江刺正吾「柔らかな文化としての軽スポーツ」奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編『やわらかいスポーツへの招待』pp54. 1998